安德　万貴子（独文学）

『ある手紙』から『塔』へ
―ホーフマンスタール文学における言語の生の展開―

フーゴー・フォン・ホーフマンスタール（1874 - 1929）は一般にオーストリア文学の最高峰とみなされる詩人・劇作家であるが、本論文は、彼の作品を支えている言語批判の思想――それは『ある手紙』（1902）ではじめて明確な表現を与えられた――と、作品内実を満たしているアレゴリー的生認識との本質的な連関を、主として彼のライフワーク、悲劇『塔』（最終稿 1927）に即して解明・叙述したもので、「序」、「第一部：『ある手紙』から劇へ」、「第二部：『塔』論」、「結び：『塔』最終稿と晩年の思想」から成っている。

「序」は、上記の論述主題を根拠づけるとともに、ホーフマンスタール研究史を概観し、そのなかにこの主題のもつ意義を定位する。そのうえで、第一部第一章において、『ある手紙』からホーフマンスタールの批判的言語観を、また『詩についての対話』（1903）からこの言語観に基づくポエジー観の要諦を取り出す。続けて第二章前半で、その萌芽を、『ある手紙』以前に書かれた詩数篇、アレゴリー劇『痴人と死』（1893）および『小世界劇場』（1897／98）に探り、彼の言語観／ポエジー観が無常・死・夢といったアレゴリー的モティーフと深い親縁性をもつことを突き止め、次に同章後半で、カルデロンの『大世界劇場』を改作したアレゴリー劇『ザルツブルク大世界劇場』（1922）を取り上げ、ホーフマンスタールの劇空間が来るべき『塔』に向かってどのように成熟しつつあるかを、表現に密着しつつ精密に検証する。

悲劇『塔』を扱う第二部では、まず第一章において、カルデロンの原作『人生は夢』とホーフマンスタールによる改作断片『人生は夢』（1901／04）を、次いでこの断片とそれを改題・改作した『塔』初稿（1923／25）を比較検討し、その都度の改稿の必然性を捉えることを通して、この改作劇の＜新たな創作劇＞としての内実を解明する。以上の準備作業ののちに、第二章において『塔』最終稿を、初稿からの更なる改稿の必然性をも明らかにしつつ、詳細に考察する。本論文全体の主要部をなすこの第二章の論述は、『塔』についての作品論であると同時に、また、ホーフマンスタール文学を支える言語観／ポエジー観の最終的な展開についての解釈にもなっている。論述の主眼は、＜言語の権力性＞の諸相を体現する人物たちとの対立のなかで変容してゆく主人公の生のありようが、希求される真の言語の姿を暗示していることを立証する点にある。「結び」では、『塔』最終稿に読み取れる言語および生についての認識が、ホーフマンスタール晩年の思想の核心たる「保守的革命」の理念の内実をなすものにほかならないことを、説得力をもって論証している。

本論文は、『ある手紙』に語られた言語批判の意識が、ホーフマンスタール文学全体を貫きかつ支えている根源的な問題意識であり、『塔』最終稿はその最高次の結実であることを、先行研究にもよく目を配り、数々の新しい知見をもたらしながら、見事に論証してみせている。それは、これまで第一次大戦後の作家の政治意識の反映として解釈されることの多かった作品『塔』に、全く新たな光を当てるものである。そしてそれにより、本論文はホーフマンスタール研究史にきわめて有意義な一歩をしるしたことになり、その功績は多大である。

以上により、本調査委員会は、本論文の著者が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいと認める。